

書評

内藤裕史 著

薬物乱用・中毒百科

高橋哲郎

本書は同著者の『健康食品・中毒百科』(2007 年)に続く、乱用される薬物についての大作である。著者生涯の使命感に基づいて書かれているだけに、実に読み応えある内容であり、しかもこなれた文章は読みやすい。

本書の内容をまず通覧すると、Ⅰ覚醒物質(メタンフェタミン、コカイン、咳止めなど)、Ⅱ大麻(マリファナ)、Ⅲ幻覚剤(LSD など)、Ⅳ解離性麻酔剤(PCP など)、Ⅴ興奮剤(MDMA など)、Ⅵ麻薬(アヘン、モルヒネ、ヘロインなど)、Ⅶ吸入物質(シンナー、燃料用ガス、噴射剤など)の7編に分類され、薬品それぞれの歴史的背景、登場をめぐる状況、中毒死などの疫学、作用・副作用、構造式、薬理、多数の詳細な事例など、1,400 の文献を網羅して書かれている。まさに「百科」と呼ぶにふさわしい学術書である。

著者は私の高校時代からの友人である。彼は麻酔医、さらに中毒の専門家になり、私は精神科医からさらに精神分析家になった。彼と同じく若い頃米国に留学し、そのまま居着いてしまった。最近、帰国して再会を喜んだのだが、その彼から本書の書評を頼まれて、専門が違うのでややちゅうちょした。しかし本書を読了して、彼が私に頼んだ理由がわかった。それはこうである。

7 編のうち 5 編が精神症状で分類されている。このように中毒は精神症状として現れることが多い。さらに、慢性状態で性格、人格の変化が現れることから自明のように、精神科を訪れる患者の多くが中毒症状単一、あるいは併発、あるいはその背景を持っている。精神科医には、それらの鑑別診断能力がまず要求される。そのうえで、治療にあたって、中毒薬物を

どのように除去するか、向精神薬をどのように有効に用いるか、さらに中毒に陥りやすい人格、性格、家族、環境の背景を、病気の理解そして治療計画や技術の中にどのように位置づけ、精神療法を含めた総合的精神科医療を一貫してどのように行うかなどについて、適切に判断実行することが要請される。本書に書かれていることは、精神科医にとって必須の知識であり、じっくり読むことを通じて、総合的能力が一段と育つであろう。私が精神科医になった頃このような本があったらよかったのにつくづく思う。書評を頼まれた理由がよくわかった。それと同じ理由で、精神科関係者に本書の熟読を薦めたい。ことに詳しい正確な症例報告は、日常の臨床に即刻役立つに違いない。

一方、一般の人々は、著者も勧めているように読み物として読んでもよい。たとえば、1931 年に始まった日中戦争は、「20 世紀の阿片戦争と考えることもできる」という著者の卓見、その歴史的経緯は我々の記憶にも残る各界の著名人が登場する一級の歴史物語でもある。国家による乱用はこのほか、諜報活動、兵器としての実験など、身の毛もよだつ内容である。

薬物使用は治療の枠を越えて今や世界にまん延し、文化の一部になった。一人ひとりが正確な知識と責任を持たないと、人類の未来はこの面から崩れるかもしれない。臨床医、研究者である内藤君が 2004 年吉川英治文化賞に輝いたのなるほどとうなずかれるのである。

(精神分析セミナー)

●B5 424 頁 2011 定価 4,200 円(本体 4,000 円+税) 丸善